

みんなの童話

風は海を越えて

信平はベランダに出た。眼下に広がる海は空の青とひとつになって、青くきらめいていた。

待っていたヨシキからの年賀状は来なかった。でも信平は、海を越えてくる風が、きつとヨシキの声を伝えてくれる、そんな気がしていた。

ヨシキが両親とブラジルに帰ったことを、信平が知ったのは、冬休みに入ってから2、3日過ぎた日だった。

なぜ、とつぜん帰ってしまったのか信平にはわからなかったが、ただ、(だまって行くなんて、あの時、死ぬまで友達だとして約束したのに)と



無茶苦茶に腹が立った。

あの時、それは去年の夏のことだった。信平やヨシキたち五年生は、3泊4日の山の学習に出かけた。

その2日目のことだった。夕食が終わり、キャンプファイヤーまでは自由時間だった。

「裏山に上ろう」

信平はヨシキをさそった。キャンプ場の裏山には、20mほどの高さの、3本の細い滝が落ちていた。滝の下や川で遊ぶことはよかったが、裏山に上ることはかたく止められていた。

だからヨシキは反対した。でも信平はむりやりに承知させ、先生や友達に見つからないように、キャンプ場をぬけ出すと山に上った。

滝の上は、信平が想像していたより大きな川ではなかった。岩を足場にして越せる浅い谷川だった。

「よし、それなら探検だ」

信平はいやがるヨシキを引っ張って、杉林に入ってしまった。

事が起きたのは、杉林から山道に出た時だった。

「お、ヤマユリだ」

草むらに花を見つけた信平がかけ寄ろうとした。ところが木の根にまずいてひっくり返った。

前は谷だった。でもクマザサにおわれていてわからなかった。

「信ちゃん」

信平を起こそうとしたヨシキまで、いっしょに谷にずり落ちた。

周りは雑草でおおわれ、ほり井戸のような谷底だった。幸いに命は助かったが信平はうでを折り、ヨシキは足をくじいて、谷をよじ上ることはできなかった。

「助けてくれ！」

「谷底へおつこちたあ！」

ふたりはけんめいにさげんだ。でも、助けは来なかった。

山の日暮れは早い。日が沈むと夏

でも寒い。わずかに月明かりのさす暗い谷底で、ふたりは寒さと痛みと、きょうふでふるえた。

「このままじゃ死んじゃう」

弱音をはき出したのは信平だった。

そんな信平を、ヨシキは、

「がんばるな、きつと助かるよ」

とはげまし、助けを呼び続けた。

先生や村人に救い出されたのは、3、4時間も過ぎたころだった。

あの時、ヨシキがいなかったら、
・と、ヨシキをばかにし、いじめもしてきた信平だったが、どれほどこうかいし、心の中でわびたことだったろうか。

風がベランダを吹き過ぎて行った。正月とは思えない暖かい風だった。

ブラジルは遠い国だ。その国のどこにヨシキがいるのか、信平は知らない。

でも、海もブラジルに続いている。空もひとつだ。風も海を越えて行く。

「ヨシキ、新年おめでとつ。ことしも元気でな」

信平は、風がきつとヨシキに声を届けてくれる。そして、いつか必ず会える。そう信じ、遠い水平線を見つめた。

寺沢 正美

阿久比創作童話の会

「しろやま」講師